

出生順位による分配方法の違い

—おやつ場面に着目して—

大 井 香 音*
岡 本 依 子**

1. はじめに

きょうだいとはどのような存在なのか。一緒に遊ぶ友だちのような時もあれば、何かを競い合うライバルのような時もある。また、身近な目標になることや良き相談相手になることもあるだろう。例えば、下の子のお世話をしていくうちに、小さい子どもが好きになったり、受験する高校や大学について兄や姉からアドバイスをもらったり、また反対に弟や妹の相談相手になったりすることもあるだろう。このように、きょうだいがいたからこそ好きになったものややりたいことを見つけれられることもある。なお、本論文では、兄弟姉妹のように、同じ家庭で生活を共にする異年齢または同年齢の子ども同士をひらがな表記で「きょうだい」とする⁽¹⁾。

きょうだいの間では「おやつを分ける」というかわりが日常的に行われている。味が違うものを分ける場合、自分の分を先に取るのか、相手を優先するのかそのきょうだいによって変わると考える。じゃんけんをしたり、話し合いをしたりして決めることもある。取る順番が決まっているということもあるだろう。

このように、きょうだい間での分配行動は出生順位やお菓子の種類によって変化があるのかと気になった。現在、日本では少子化が進んでおり、きょうだいという存在は貴重なものになっていると考える。そんななか、きょうだいは子どもたちの発達にどのような違いをもたらすのか着目して研究に取り組みたい。

2. 目 的

「ものを分け合う」という行為を分配行動という。分配行動とは、子ども同士で分け合う行動のことで、分け合うことで自分の取り分を守るための知恵がついたり、自分の取り分を相手に譲ったりする幼児期に見られる代表的な行動であり、向社会的行動の一つである。Eisenberg (1991) によると、向社会的行動とは、他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする自発的な行為のことである。向社会的行動は強要されてなされるものではなく、自発的になされるものである。

これまでに分配方法についてさまざまな研究が行われている。平井 (2017) は、自己と他者の要求が葛藤する4つのジレンマ場面を提示した。ジレンマ場面は、友だちと母親の各2場面ずつ提示した。結果、自己および他者を優先する程度は場面により異なることがわかった。特に「友だちに大切なものを貸してほしいと頼まれる」という自己にとってより深刻であると考えられる場面において自己優先的傾向が高く、その他の場面では他者優先傾向が高いと述べている。宝物に関する場面で自他の両者に配慮できる子どもはそうでない子どもよりも年齢が高く、語彙が多く、他者の誤信を理解しており、社会的ネットワークに家族以外の成員を含む多様なメンバーを持つことが示唆された。年齢別にみると、年齢が高い群では低い群よりも自己優先的な傾向が低く、他者優先的な傾向が高いと述べている。このことから、年齢だけでなく何を分けるの

* 立正大学社会福祉学部子ども教育福祉学科令和3年度卒業生

** 立正大学

キーワード：出生順位、きょうだい、分配

か、誰と分けるかによっても違いが出てくることがわかる。この研究では母親と友だちの場面に分かれていたが、きょうだいならばどうなるのだろうか。

このように、誰しも「ものを分け合う」という行為をしたことがあるだろう。幼少期ではおもちゃやおかしなど、遊びや食事の場面で「分け合う」ことは行われている。数々ある「分け合う」場面の中でも、本研究では、きょうだいで分け合う場面、出生順位によって違いがあるのかに着目する。

出生順位と聞いて、どのようなイメージがあるだろうか。いわゆる「長子あるある」や「末っ子あるある」など、出生順位による性格の特徴について誰しも話したことがあるのではないだろうか。例えば一般的には、長子なら真面目で頼りになる、中間子なら年上年下どちらともコミュニケーションをとるのがうまい、末っ子なら甘え上手で自由気ままなどのイメージがある。

きょうだいに関する研究について、依田・深津（1963）は、長子は自制的、ひかえめ、親切など、次子は快活、依存的等の性格特性を持つと述べている。また、子どもの出生順位によって親の役割形態・子どもの役割認知が異なっているという結果になった。さらに、きょうだいの年齢差が2～4歳であるときに、きょうだいの性格差異はもっとも顕著に表れると述べている。このことから、きょうだい間での分配行動については、長子が自制的、ひかえめな性格であるのなら、次子に譲るような予想ができる。

さらに、相川（2010）はきょうだい数または出生順位というきょうだい構成の違いによって、ソーシャルスキルの獲得の程度に違いがあったと示している。具体的には、「一人っ子」は、関係開始スキルに関して3人きょうだいや長子よりも高い得点を示し、主張性スキルに関して3人きょうだいよりも高い得点を示していた。「一人っ子」は、他者との関係を始めるスキルが高かった。また、男子の「2人きょうだい」は、女子の「2人きょうだい」や「一人っ子」、「3人きょうだい」よりも感情統制スキルが高いことがわかった。出生順位で言えば、「長子」は、関係開始スキルが「一人っ子」よりも低く、感情統制スキルは「中間子」よりも高い値を示していた。「末子」に関しては、大きな特徴は見受けられなかった。つまり、人と仲良くなるために必要な力や、自分の感情をコントロールする力が出生順位によって高かったり、低かったり特徴があると考えられる。一人っ子は親を独り占めでき、我慢

することが少ないため、きょうだいがいる子どもに比べ、主張性が高くなると考える。長子の感情統制スキルが中間子よりも高いのは、下のきょうだいがいる分、何かを我慢する場面が多いからではないかと考える。例えば、自分もまだまだ甘えたい時期だが、弟、妹がいることによって、親に甘えられない。このように我慢をすることにより自分の感情をコントロールする感情統制スキルが自然と高くなるのではないかと考える。

被服を中心としたおしゃれへの関心がきょうだい数、きょうだいの性別構成及び出生順位に関係があったと市川（2010）は述べている。一人っ子やきょうだい構成が女一女の場合、おしゃれへの関心が高くなり、男きょうだいがいる場合、関心度は低くなる傾向があった。私は洋服も兄からのおさがりをもらうことが多かったため、女の子らしいものよりも動きやすい、かっこいい印象のものを好んでいた。他にも漫画やゲームなどの趣味も兄がやっていたものに影響を受けた。また反対に、私の好きな音楽やテレビ番組を弟が好きになっていることもあった。社会的スキルだけでなく、ものに対する興味関心にもきょうだいの構成が関係していることがわかる。

また、出生順位は子どもたちだけでなく、保護者にも影響を与えている。苦米地（2012）は教育達成の要因に家族やきょうだい構成が関係しているのか調査を行った。調査の結果、家庭環境が同じであっても、性別や出生順位などによって教育達成に差異が生じていることが明らかとなった。家庭環境を示す1つの指標として用いた出生間隔の平均値について、その値が大きくなるほど教育達成に負の影響をもっているという分析結果がでた。さらに、出生順位の効果については、近年のコーホートを用いた他の先行研究の結果と同様、出生順位の遅い子どもの方が、教育達成が低くなるという結果が得られた。星野・青木・福住・山口（2011）は心理的距離を測定すると同時に、「きょうだいの位置要因（長男や次女など）・種別要因（男兄弟・女姉妹・男女混合など）」をきょうだい種別要因と心理的距離は関係しているという仮説を立て検討した。結果として、きょうだいの位置を、上群（長男・長女）・中群（次男・次女）・下群（末っ子）・無群（1人っ子）の4種類に分け、性格特性・シャイネス特性・心理的距離の記述統計量を示した。きょうだいの位置要因と性格特性・シャイネス特性・心理的距離について分散分析を行い、その結果を示した。この分散分析により、性格特性・

シャイネス特性において有意差を認めることができなかったが、ペットとの心理的距離では、下群が上群よりもペットとの距離が近いことがわかった。下群はペットを自分の弟・妹のような存在としているためと考えられる。また、無群にはこのような結果がみられないため、兄や姉の存在が関係していると示唆された。つまり、下群（末っ子）は普段から兄や姉にお世話をしてもらうことがあるため、兄や姉の真似をペットにしているのではないかと考える。星野ら（2011）が指摘する種別要因による心理的距離の変化も興味深い。「男子だけの兄弟群」は「女子だけの姉妹群」よりも父親との心理的距離が近いことがわかった。同性同士の方が異性同士に比べ、心理的距離が近くなることがわかる。さらに、父親、母親との心理的距離の平均が1番遠かったのが中群（次男・次女）だった。中間子は長子や末子に比べると過ごす時間が少なくなると思う。長子なら次子が産まれるまでは親を独り占めできるし、末っ子は上の子が学校や保育園などに行っている間に親との時間が過ごせるかもしれないが、中間子にはその時間が少ないと考える。そのため、心理的距離も遠くなってしまうのではないかと考える。

篠原・曾我部（2014）は、幼稚園児の食生活に関する保護者の意識と出生順位の関連性を調べた結果、「遊び食べ」では第一子弟妹なし群が26.9%に対して第一子弟妹あり群で14.6%、第二子以降群が8.3%とで第一子弟妹なし群が他の群と比較すると高い傾向がみられ、兄弟の有無で差が出やすいことがわかった。つまり、第一子は子育てをしたことがない保護者にとって全てが初めての経験で悩むことが多いと考える。第二子の時には、第一子での経験を活かし、どうすれば良いのかわかってくるため、保護者にも余裕ができる。このように出生順位によって保護者からの考え方も変わってくるのだ。

なお、本研究はワンケーススタディを行う。ワンケーススタディとは、一つの研究の対象が1つだけの研究方法である。1組のきょうだいからのデータではあるが、その分、より深く分析、考察がしていけるのがメリットとしてあげられる。

本研究では、出生順位によって分配方法に違いがあるのかお菓子の種類に着目して検討する。子どもによって分け方がどのように異なるのか、種類によって分け方が変わってくるのか、お菓子をういた実験についてはエピソード分析を行い、そこに保護者へのインタ

ビューによる情報を補足的に用いながら、ケーススタディならではの深い分析を試みる。

3. 方 法

調査対象 調査協力児は、A県在住の6歳3か月の男児（以降A）と4歳0か月の男児（以降B）のきょうだい1組である。調査協力児の保護者は文書による研究依頼状によって説明を受け、承諾を得られたものである。

材 料 ビデオカメラ、皿
お菓子

- | | |
|--------------|--|
| ① 大きさが違うもの | LOTTE チョコパイ、
LOTTE プチチョコパイ |
| ② 数がわかりにくいもの | Calbee ポテトチップス
コンソメ味 |
| ③ 味が違うもの | 不二家カントリーマーム
バニラ味、ココア味 |
| ④ 見慣れないもの | ネスレアミューズキット
カットミニ大人の甘さ濃い
抹茶
不二家 Look 青い宝石 |

調査実施日 観察は、20××年8月に1回、9月に3回の計4回行った。実験時間は食事時間も含めそれぞれ約20分間であった。

場 所 調査は筆者が調査協力児の自宅に訪問して行った。

手続き 実験者は調査協力児と机を挟んで向かい合って座る。調査協力児を1人ずつ呼び、実験者は日常会話を混ぜながら、お菓子を分配するよう課題を提示し、実験法によって調査していく。全行程は、保護者の了解を得て録画した。

お菓子は①数がわかりにくいもの、②大きさが違うもの、③味が違うもの、④見慣れないものの4種類用意した。2種類ずつ実験を行った。

1日目 弟B ①大きさが違うもの、②数がわかりにくいもの

2日目 兄A ③味が違うもの、④見慣れていないもの

3日目 兄A ①大きさが違うもの、②数がわかりにくいもの

4日目 弟B ③味が違うもの、④見慣れていないもの

教 示

①大きさが違うもの

(1) 調査協力児を1人呼ぶ、

- (2) 机の中央に皿を2枚置き、自分用の皿ときょうだい用の皿を決めてもらう。
- (3) お菓子を見せる。
大きいもの1つ、小さいもの2つのどちらかを選んでもらう。
- (4) 調査協力児が分け終わったのを確認し、どうしてこのように分けたのか質問する。
- (5) 別室で待っているもう一人の調査対象児を呼んできてもらい、分けたお菓子を食べてもらう。お菓子を食べ終わるまで観察を続ける。

②数がわかりにくいもの、④見慣れていないもの

- (1) 調査協力児を1人呼ぶ。
- (2) 机の中央に皿を2枚置き、自分用の皿ときょうだい用の皿を決めてもらう。
- (3) お菓子を見せ、「二人で分けてね。」ときょうだいで分けるよう伝える。
- (4) 調査協力児が分け終わったのを確認し、どうしてこのように分けたのか質問する。
- (5) 別室で待っているもう一人の調査対象児を呼んできてもらい、分けたお菓子を食べてもらう。お菓子を食べ終わるまで観察を続ける。

③味が違うもの

- (1) 調査協力児を1人呼ぶ。
- (2) 机の中央に皿を2枚置き、自分用の皿ときょうだい用の皿を決めてもらう。
- (3) 2種類の味のお菓子を見せ、どちらかを選んでもらう。
- (4) 調査協力児が分け終わったのを確認し、どうしてこのように分けたのか質問する。
- (5) 別室で待っているもう一人の調査対象児を呼んできてもらい、分けたお菓子を食べてもらう。お菓子を食べ終わるまで観察を続ける。

4. 結果と考察

4-1 分け方の結果

4種類のお菓子の分け方の違いを兄と弟で比較するため、実験場面の録画データからエピソード記録として書き起こした。以下、エピソードを参照しながら質的に分析を行う。

①大きさが違うもの（チョコパイ）

①-兄

兄Aにチョコパイを提示すると、「前食べたやつだ。」と言う。(a)「分けてね。」と伝える前にすぐに自分の皿に大きい方のお菓子を入れる。どうしてこう分けたのか聞かれると、(b)「俺ね、でっかいの食べられるから。」と笑顔で返す。分け終わるとすぐに「次のものは何ですか。」と話題をそらす。

(a)のようにこちらが分けるよう指示を出す前にお菓子に手を伸ばしていることから、「早く食べたい。」「自分の皿に入りたい。」という気持ちが表れている。これは、言い換えると、兄Aが実験者の指示前に手を出したことは、実験者である大人からの指示は平等に分けることを求められると推測したせいではないだろうか。つまり、6歳のAは、分配行動における平等性を理解していることがうかがえ、きょうだいという関係性のなかでみられる相手への甘えの感情がみられたものといえる。(b)は明確な理由はないが、自分の食べたい方を取ることができて満足している様子が伺える。また、「でっかいの食べられるから」という発言から、きょうだいという関係が家庭外での仲間関係とは異なり、恒常的であり、きょうだいの関係性を表しているといえる。さらに話をそらしたことから、平等でないことに対する若干の後ろめたさも発達しているようである。

①-弟1

弟Bはチョコパイを提示され、(c)「大きいのと小さいのがあるよ。」と伝えられると、すぐに「俺大きい。」と言い、大きい方のチョコパイをとる。「大きい1つか、小さい2つだけどっちがいい。」と再度聞かれるが、「こっち。」と言い、大きい方をとる。

どうしてこう分けたのか聞かれると、(d)「だって俺でかいのがいいから。」と答える。その後も大切そうに自分の分のチョコパイを持つ。残った小さい方のチョコパイを兄の皿に置く。

(c)も兄Aの(a)の記述同様に、「早く食べたい。」という気持ちが表れているのがわかる。(d)も先ほどの兄Aの(b)同様、自分の食べたい方を取ることが出来て満足している様子が伺える。

2人の結果を見比べてみると、どちらも自分の食べたい方を先にとり、とても満足していることがわかる。大きさがちがうものでは、個人差は見られず、2人とも同じ結果になった。つまり、6歳および4歳の両方

が、個数よりも大きさを優先して自分に有利な方を選んだことがわかる。

しかし、弟Bが分けた後の食事中に大きさを気にするようなやりとりがあった。それについても記述した。

①-弟2

弟Bは兄Aを呼びに行くと、(e)「お兄ちゃん小さいの。俺でかいの。」と説明しながら一緒に来る。(f)しばらく食べた後、兄が「これ小さいのとでかいのなんだ。」とチョコパイを指しながら言う、弟は「お兄ちゃんてでかいのが良かったの。」と笑顔で質問した。(g)兄は何も答えなかったが、しばらく大きいチョコパイを見つめていた。

兄Aに「自分の方が大きいやつだ。」とアピールしていることがわかる。きょうだいとは年齢差のある恒常的関係であることを踏まえると、弟にとって、大きい方を先に選ぶ経験は、非日常的な経験として捉えられていたと推察される。さらに、兄Aが大きさの違いに気づくと、弟Bが「お兄ちゃんてでかいのが良かったの。」と笑顔で質問したこと、「羨ましいでしょ。」「お兄ちゃんよりも大きいやつだよ。」とアピールしていると考えられる。(g)で兄Aは質問に答えることはなかったが、食べている間弟の方を見ていた。このことから、Aも大きい方が食べたかったことがわかる。

②数がわかりにくいもの(ポテトチップス)

②-兄

兄Aは、ポテトチップスを分けるよう伝えられると、(a)自分の皿と弟Bの皿に1枚ずつ一緒に入れる。分ける様子を見に来た弟Bに対して「見たらダメ。」「やめてほしい。」と注意する。(b)何枚か入れ終わった後、「なんかちょっとでかすぎだな。」と弟Bの方の皿を見ながら言い、自分の皿のものと何枚か交換する。

どうしてこのように分けたのかを聞かれると、(c)「うーんとね、なんだったっけ。」と少し考えた後、「忘れちゃった。」と答える。「忘れちゃったの。」と聞かれると、頷き、「忘れちゃったからわからない。」と目線をそらしながら答える。

(a)のように1枚ずつ均等になるよう対配分をしている。1枚の大きさにこだわらず、小さいものも1枚と数えており、自分の皿に小さいもの1枚、弟Bの皿に大きいものを1枚という分け方もしていることから、枚数を重視して分けているようだ。しかし、ある程度

分け終わった後、(b)で言っているように全体的な量を見て弟Bの皿の方が大きいポテトチップスが多いことに気づく。弟Bの皿からとるのではなく、自分の皿に入っているものと交換していることから(a)と同様に枚数へのこだわり、すなわち個数に対する(量というよりも)平等性の発達がみられるようだ。

(c)理由が上手く説明できない様子。さらに目線をそらす頻度が多いことから、何か後ろめたいことがあるように伺える。兄Aは長子あるいは6歳児として、分配場面における自己利益の確保と、他者利益を優先する優しさとの間のジレンマを感じ始めているのかもしれない。

②-弟

弟Bは、ポテトチップスを分けるよう伝えられると(d)「めっちゃ入れる。」と言いながらまず自分の皿にポテトチップスを入れる。「このぐらい」と言い、自分の分を取り終える。その後、「いっぱい入れる。」と言いながら兄Aの分の皿に分ける。自分の分を分け終えてからは、自分の皿は一切触らない。枚数的には兄Aの皿の方が多く、数を数えている様子はない。(e)小さいのを実験者に見せ、笑顔になる。「小さいね。これ好きなの。」と聞かれると、「うん」と答える。その後、自分の皿ではなく、兄の皿に小さいポテトチップスを入れる。

紙皿にポテトチップスを少し残して分けるのを終わった。

どうしてこのように分けたのかと聞かれると(f)「穴空いてるから」と自分の皿に入れたポテトチップスを見ながら言う。さらに、兄の分を入れた「お兄ちゃんのは穴空いてないじゃん。」という。

(d)からまず自分の分を確保してから兄の分を入れ始めているのが分かる。その後兄Aの分を入れ始めると自分の分は全く触らないことから「自分の分を十分にとった。」という満足感が伺える。(e)では、弟Bが小さいポテトチップスを見て嬉しそうにしていたので自分の皿に入れるかと思いきや、兄Aの方の皿に置いた。(d)から引き続き、自分の皿には触れていない。自分の好きなものを兄Aに譲ったことから、「兄に食べてほしい」と考えているのではないかと伺える。

分け方について質問すると(f)のように答えた。ポテトチップスが重なってできた空洞を見て、「穴」という表現をしている。自分の方は「穴が空いている」と言い、

兄の方は「穴が空いていない」と言っていた。このことから、「穴が空いていない」方がみっちり詰まっていて、兄の分が多いという意味を示していると考えた。

表1. ②数がわかりにくいものの分け方の結果

	兄A	弟B
分け方	2枚の皿にポテトチップスを1枚ずつ交互に入れる。	まず自分の皿に入れ、次に兄の分を入れる。
量	平等になるよう入れる。	兄の方によく入れる。
枚数	数える。 平等になるよう入れる。	数えていない。

数がわかりにくいものを分けるときには、兄Aと弟Bで異なる分配行動が見られた。兄Aと弟Bを比べると表1のような結果になった。兄Aは量だけでなく枚数にもこだわって平等になるよう分けているが、弟Bは兄Aの分を多く分けていることがわかる。さらに、(e)弟Bは自分が気に入っていたかけらを兄Aの分に分けている。このことから、兄Aの取り分を多くしていることがわかる。

しかし、この時一緒に大きさがわかりにくいものを分けてもらった。そこで弟Bは兄Aのところに小さいチョコパイを分けていたことから、「チョコパイが小さい分、ポテトチップスを多めに入れてあげよう。」と思ったのかもしれないとも考えられる。どちらにせよ、弟Bは「兄の分を多く入れる。」という意識をしていることがわかった。兄とはひとりっ子を経験して兄になるが、次子は生まれたときから少し年上のきょうだいがいる。年齢の差は能力の差であり、周囲への配慮といった次子の特徴は、このような日々の経験を通して、自分が満足した後は十分に発揮されるのかもしれない。

③味が違うもの（カントリーマアム バニラ味 チョコ味）

③－兄

実験者がバニラ味とココア味のお菓子を提示すると、兄Aは(a)自分の皿にココア味の方を入れる。どうしてこのように分けたのか聞かれると、(b)「僕ね、これ（バニラ味のお菓子）Bが食べるかなって思ったから。」と言う。しかし、(c)バニラ味だということを思い出すと「バニラにする。」と言いながら自分の皿のココア味のお菓子と弟Bの皿のバニラ味のお菓子を交換する。(d)どうして変えたのか質問されると、

「バニラの方がおいしそうだから。」と笑顔で答え、「アイスでもバニラ味があるからね。」と言う。

(a)から自分の方を先に確保していることがわかる。(b)で言った理由から、弟に譲っているような表現をしている。しかし、保護者からのインタビューでは「2人ともチョコ味のお菓子が好き」と言っていたため、まずは自分の好きな方をとったとも考えられる。

分け終えたかと思っていたが、お菓子の味を知ると(c)のように交換する。(d)からアイスのバニラ味がおいしいことから、クッキーのバニラ味もおいしいと思っていることが伺える。

③－弟

弟Bにバニラ味とココア味、2種類のお菓子を提示すると(e)「俺、チョコレート」と言いながら、ココア味の方を自分の皿に入れる。その後、残った方を兄Aの皿に入れる。どうしてこのように分けたのか聞かれると、(f)笑顔になり、「分けちゃったから。」と言う。嬉しそうに自分の皿に入ったお菓子を見る。

(e)から大きさが違うもの同様に、自分の分を確保してから兄Aの分を分けている。(f)の理由を話す際に笑顔で言っていることから自分の好きなものを確保でき、喜んでいる様子が伺える。

保護者からのインタビューでチョコ味のお菓子が好きだと聞いていたため、どちらもココア味の方をとると予想していた。弟Bはすぐにココアを選び、兄Aは最初ココア味を選んでいたがもう一方がバニラ味だとわかるとバニラ味を選んだ。

分けた理由を聞いた時に兄Aは弟に譲るような表現をしていたが、交換した後の理由は自分が食べたい方をとったと話している。今回の実験だけではわからないが、兄Aは実験者からの質問に対して兄としての社会的望ましさに気づき、弟Bにココア味を譲りつつ、一方で自分の納得を得るための合理化として、バニラ味だからという意味付けを行った可能性もある。

④見慣れないもの（兄：キットカット抹茶味 弟：青い宝石チョコ）

④－兄（キットカット抹茶味）

兄Aは、抹茶味のチョコを提示され(a)見たことあるか聞かれると、「なんだったっけ。」としばらく考

える。「キットカットって言うんだよ。」と説明されると、「あれか。」と思い出したように言う。真剣な表情でお菓子を見る。「何味なの。」と質問してきたが、実験者が「なんだろうね。」とはぐらかすと、下を向く。抹茶味のキットカットを3つ提示されると(b)弟Bの方に2つ、自分の皿に1つ置く。どうしてこのように分けたのか聞かれると、(c)「Bがね、2個だと嬉しそうだから。」と笑顔で言うが、すぐに真顔になる。

(a)で「何味なの。」と質問したり、真剣にお菓子を見たり、お菓子に興味があることがわかる。しかし、他のお菓子に比べると笑顔が少なく、表情が暗いことから“楽しみ”という感情よりも“不安”や“警戒”というように伺える。

(b)から、弟Bの方を多く取り分けたことと、他のお菓子と違って自分の分よりも先に弟Bの方に分けたことがわかる。見慣れないものに関しては、他者に分配することに寛容であった。

(c)で弟Bを思いやる表現をしているが、どのような味かわからないお菓子に警戒していて、自分の分を少なくしたのではないかと考えられる。一度笑顔をみせるが、すぐに真顔になっていることから、楽しくなさそうな雰囲気が感じられる。

④-弟 (青い宝石チョコ)

弟Bは、お菓子を提示され、見たことあるか聞かれると、(d)「ある。」と元気よく答えるが、しばらくすると、「食べたことないやつだ。」と笑顔で言う。お菓子5個を2人で分けるよう伝えられると、(e)はじめに兄Aの皿に2つ、次に自分の皿に2つ置く。残った1つを見て、「パキってしてもいい。」と聞きながらお菓子を半分に折り、それぞれの皿に入れる。どうしてこのように分けたのか聞かれると、(f)「分けちゃったから。」と笑顔で答える。

(d)では初めて見るお菓子に対して他のお菓子と変わらない反応をする。(e)では兄Aの方を分けてから、自分の分を分けている。さらに、5個渡されたお菓子をきちんと半分に分けるために、「パキってしてもいい。」と聞き、1枚を折って分けている。平等に分けることにこだわっている。(f)ではうまく説明が出来ていないが笑顔で言っていることから、食べるのが楽しみな様子が伺える。

2人に共通していえるのが、お菓子を分ける時に相手のものから分けてから自分の分を分けていることだ。しかし、兄は自分の分を少なく、弟はきちんと半分に分けるという結果になった。このようになった理由はお菓子への興味・関心からではないかと考える。

兄Aは見慣れないお菓子に対して「何味なの。」と質問してくることや、不安そうな表情が多く、警戒していたのだろう。「おいしいのかな。」や「あまり食べたくない。」という気持ちが表情に表れていると伺える。弟は「見たことないやつだ。」というものの、表情は笑顔で「どんな味だろう。」「食べてみたい。」という気持ちが出ていると考えられる。保護者とのインタビューで2人とも食わず嫌みがあり、見慣れないお菓子はあまり食べようとしないと聞いたが、今回このような結果になった。弟Bはいつものようにきっちり半分に分けたが、兄Aは不安な気持ちから自分よりも弟の方を多く分けたのではないだろうか。

4-2 食事の様子 取り合い

ポテトチップスを分け終わった後、兄も弟も提示したものや少し残して分配した。どのような行動をするのか気になったため、片付けずにそのまま机上に置いたまま、お菓子を食べることにした。その場面が2回あったそれぞれの場面で違った行動が見られた。場面X I：兄が分けたとき、および、場面Y I：弟が分けたときで、場面ごとに2人の行動を比較し考察する。

X I. 兄が分けた時 (同じ量)

2人で「いただきます。」と言った後、(a)お菓子を分けた兄Aが残っているポテトチップスを弟Bの皿にいくつか入れた。すると弟Bは残っていたポテトチップスのほとんどを両手でとり、自分の皿に入れようとした。それを見た兄Aは「ねえー」と言いながら弟Bの手を自分の皿の上に持っていく。そして弟Bは両手いっぱいを持っていたポテトチップスを兄Aの皿に入れてしまう。(b)弟Bは、まだ残っているポテトチップスをなんとか自分の皿に入れようとするが、兄Aは「これは僕のだ。」と言いながらほとんど自分の皿に入れてしまう。弟Bはとられた時に「うわあ」と言うだけで、兄Aの皿からとることはなかった。(c)2人は終始笑顔でやりとりをしていた。

しばらく食べていると、(d)弟Bは兄Aの皿をじっ

と見つめていた。そして「もうちょっと入れたい。」と言った。何を入りたいのか聞かれると、先ほどまでポテトチップスが入っていた皿を指さして「これにもうちょっと入れたい。」と言った。

さらに弟Bは(e)完食間近の時に「もうちょっとさポテトチップス食べたい。」と言った。

(a)で兄Aは弟Bに少し分けようとしていたが、それを見た弟Bは残っているものは取っても大丈夫だと思い、残りを全て自分の皿に入れようとしている。その様子を見た兄Aは焦り、弟Bの分を自分の皿に入れるよう動かしていた。お菓子を分けたのは兄Aで、ポテトチップスが残っていることについて質問した時は「これくらいでいい」と答えていたが、相手が取っているのを見ると「自分の分がなくなる」と焦り、このような行動をとったと考えられる。また、(b)では弟Bが自分の皿に入れようとしていたポテトチップスを全て兄Aに取られたが、特に文句も言わず取り返すような行動をしなかった。これは「取られたからしょうがない。」という諦めの気持ちや譲る気持ちがあったからこのような行動をとったのではないだろうか。(c)で書いたように、2人は笑顔でやりとりしており、これは先ほど述べたように弟Bの譲る気持ちがあったから喧嘩などにならなかったと伺える。このような互いの利益が相いれない場面において、きょうだいは感情的に喧嘩をすることもある。しかし、言葉による主張や相手への行動、表情を駆使して、感情をコントロールしながらこの場を悪化しすぎないように相互に調整していた。とくに、笑顔は、互いの緊張状態を調整する機能があったといえる。身近に年が近く、しばしば利害が衝突するきょうだいであるからこそ、相互に調整機能を発達させる機会となっていることが伺える。

一度終わったかのように見えたポテトチップスの取り合いだが、食事中に弟Bから(d)や(e)のように「もっと食べたい。」という要望があった。先ほど兄Aに取られた分をしょうがないと思い、反抗する様子など見られなかったが、やはり「もっと食べたい。」と思っていたのだろう。しかし、兄Aに向かって言うのではなく、実験者に対して言ってきたことから、「兄の分をとる」ことや「兄に分けてほしいと要望する」ことは出来なかったのだろう。このことから、兄Aに対して少し遠慮している、反抗してはいけないと思っているのではないかと考えられる。

Y I. 弟が分けた時（兄が少し多め）

兄Aがある程度お菓子を食べた後、(f)「これ食べ終わったらこれもう1個。」とポテトチップスが入った皿を指さして笑顔で言う。実験者に「いいよ。」と言われると、弟Bも「僕も食べるんだ。」と笑顔で言う。

その後、(g)先に食べ終えた兄Aは「ポテチのおかわりくーだーさい。」と言い、残っているポテトチップスを自分の皿に入れ始める。するとそれを見た弟Bはお菓子を口いっぱいに入れ、急いでおかわりを取ろうとする。

(h)兄Aは「でかいのとでかいの。」と言いながら、大きいポテトチップスを4枚自分の皿に入れる。弟Bは兄の二倍ほどの量を自分の皿に入れる。弟Bは「こんなに取るの?」と実験者に質問されると、「うん。」と笑顔で答えながら、まだ残っているポテトチップスをさらに取る。それを見た兄Aも急いで残っているポテトチップスに手を伸ばす。

(i)弟Bが「俺の方がパンパンだよ。」と笑顔で言うと、兄Aも「俺も。」と笑顔で言う。その後、弟Bは「俺の方がパンパン?」と実験者に問いかける。

(j)皿に残ったポテトチップスのかけらがあつたので「これどうする?」と聞くと、弟Bは「でかいのあるから大丈夫。」と言い、兄Aは無言のまま残っていたポテトチップスを全て自分の皿に入れた。すると弟は「ちっちゃいのだけある。お兄ちゃんのは。」と言った。

(f)から、残っているポテトチップスを狙っていることがわかる。(g)では先にお菓子を食べ終わっておかわりを取ろうとしている兄Aを見た弟Bが「自分の分がなくなってしまう。」と焦っている様子が伺える。また、食べ終わってからでないとおかわりができないわけではないが、弟Bが兄Aの行動を基準として採用したといえるだろう。(h)の最初からもわかるように兄Aは1人で残ったポテトチップスの中から自分の好きな大きなものがないか選びながら取っているが、弟Bは何も気にせずとにかく多く取ろうとしている。すると兄Aは焦って残っているものを取っている。お互い相手に取られたくない、相手よりたくさん食べたい、自分の分を多く取りたいという気持ちがあることがわかる。

(i)(j)で弟Bが「俺の方がパンパンだよ。」や「ちっちゃいのだけある。お兄ちゃんのは。」と発言していることから弟Bは自分の取った方が多いとアピールしているのがわかる。自称の「俺」が用いられており、これは自分を強く大きく見せたいときの自称であり、興味深い。兄に対して対抗心があるのだろう。それに対

して兄Aは特に反応していないことからAはあまり気にしていないことが伺える。

X I, Y I の2つの場面は残っているポテトチップスを奪い合っている様子だが、それぞれ違った行動がみられた。X I の場面では兄Aが多く取ったのに対して、Y I の場面では弟Bの方が多く取っている。X では弟Bが兄に譲り、Y I では兄Aが弟に譲っているように見られた。奪い合う際、口論になったり手を出したりはしていない。

X I の場面で兄Aに残っていたポテトチップスをほとんどとられた弟Bは「もっと食べたい。」と言っていることから、分けた結果に納得がいていないことがわかる。Y I の場面での兄Aは特に何も言わなかった。X I の場面では、量的には弟Bの方が多く取ったが、兄Aも大きめのポテトチップスを何枚か確保できたため、兄は納得がいく結果になったのではないかと考えられる。

また、両者ともに実験者と2人きりの場面で分配をしている時には残していたポテトチップスも、兄Aと弟Bが2人そろそろ分けた時点で「いらない」や「もう大丈夫」と言っていたのにも関わらず、奪い合っていた。このことから「相手にとられたくない」「自分の分を多くとりたい。」と意識していることがわかった。

4-3 お菓子に対する興味関心

④見慣れないお菓子で、お菓子に対する反応が他のお菓子と違った。食べている時も他のお菓子とは違った様子が見られた。エピソードをもとに分析し、考察する。

X II. キットカット抹茶味 (兄が分けた)

(a)弟Bがキットカットを食べようとする、兄Aも「僕も」と言い食べ始める。(b)「これって抹茶？」と兄Aが質問する。(c)弟Bはキットカットの約半分を口に入れるが、すぐに「これ嫌いなんだ。」と言い、実験者にお菓子を渡す。(d)兄Aは弟Bが食べる様子を見ながら「どう？」と味の感想を聞いている。その後兄Aはキットカットをほんの少し口にしたが、下を向きながらお茶を飲み、「ちょっとだけおいしいけど。」と黙ってしまう。実験者に「おいしくない？」と聞かれると頷き、「(戻して) いいよ」と言われると実験者にお菓子を渡す。

(a)では、弟Bが見慣れないお菓子を食べると言ったのに対し、兄Aが「僕も。」と言いつつも一緒に食べようとしていることがわかる。(b)では味について質問があった。この日にお菓子を分けたのは兄Aなのだが、分ける時にも何味なのか質問をしてきた。味がわからないことに不安を感じていると伺える。

(c)と(d)からは兄Aと弟Bのお菓子を食べる時の違いが見られた。弟Bは勢いよくお菓子を口に入れたのに対し、兄Aは少量しか食べなかった。さらに、兄Aは弟Bが食べる様子を観察し、「どう？」と味について質問をしていることから、お菓子に対して警戒している様子が見られた。(d)の後半で「まずい」や「おいしくない」とは言わないことから、兄Aはお菓子を用意した実験者に対して遠慮しているような様子が伺える。

Y II. 青い宝石 (チョコ) (弟が分けた)

(e)兄Aはまず他のお菓子を食べ、弟Bは青色のチョコを最初に食べた。兄Aはチラチラと何回か弟Bの方を見る。弟Bは「まずい」と言いつつもチョコを食べる。(f)その後兄Aは机の下にあったチョコのパッケージを見つけ、「これ何」と質問し、箱をじっと見つめる。(g)弟Bは笑顔で話すのに対し、兄Aは終始表情が固い。

(h)兄Aは他のお菓子を食べ終わると、青いチョコを残したまま席をたつ。少しすると戻ってきて、青いチョコをほんの少し食べ「そんなチョコいらない。」と実験者に皿ごと渡す。食べないのかと少し大げさに聞かれると、「虫菌になりそうだから。」と答える。

(i)すると、その様子を隣で見ていた弟Bが「僕いる。」と元気よく言う。そして兄Aの皿にある青いチョコを自分の皿に移す。兄Aはその様子を見ても何も言わない。どんな味がするか聞かれると、弟Bは「まずい味。」と笑いながら言う。まずいと言っているが黙々と食べる。

(e)から、兄Aは弟Bがお菓子を食べどのような反応をするのか観察しているのがわかる。さらに(f)でパッケージに興味を示していることから、味についての情報を探しているように考えられる。弟Bには分けてもらう時にパッケージを見てもらったので、気にせず見せたが文字を読んでいるようだった。しかしパッケージの表記はアルファベットやカタカナがほとんどだったため、読めなかったのだろう。

(g)から弟Bは楽しそうなのに対し、兄Aは不安そう

な表情が多いことがわかる。味が想像できず不安なのだろう。

(h)で席を立ていることから食べたくない気持ちが表れている。兄Aは1口食べた後、「まずい」とは言わず「虫歯になりそうだから。」という理由から食べたくないと話している。マスカット味のチョコなのだが、マスカットは好きなので食べられないというわけではないと考える。見た目から影響が大きいのではないだろうか。

(i)ではチョコをいらないと言う兄Aとは反対に、弟Bは「僕いる。」と食べたいという気持ちが表れている。味はまずいらしいが、チョコが好きのため食べているのではないかと考えられる。

XⅡとYⅡで共通して言えることは、どちらも弟Bの方が兄Aよりも先に食べていることだ。弟Bは見慣れないものから先に食べているのに対し、兄Aは必ず他のお菓子を先に食べている。さらに兄Aは弟Bが見慣れないお菓子を食べた様子を観察している。弟Bは挑戦的なのに対し、兄Aは見慣れないお菓子に対しての恐怖心、警戒心が強く、慎重だと考えられる。一般的に、第一子は親も子育てに慣れておらず、慎重に育てられると言われているが、第一子である兄Aの方がお菓子に対して慎重であったことは、育てられ方のきょうだい間の相違が影響しているのかもしれない。

また、兄Aは食べない理由として「まずい」という言葉を自分から言わないようにしている。これは実験者に遠慮しているのではないかと考えた。

5. 総合的考察

本研究では、出生順位によって分配方法が異なるのかお菓子を分ける実験を通して分析を行った。兄Aと弟Bそれぞれの4種類のお菓子の分けた結果をまとめたのが表2である。

表2. 4種類のお菓子の分け方

お菓子の種類	兄A	弟B
①大きさが違う (チョコパイ)	大きい方 (自己優先)	大きい方 (自己優先)
②数がわかりにくい (ポテトチップス)	平等	兄が多め (他者優先)
③味が違う (カントリーマアム)	バニラ (自己優先)	チョコ (自己優先)
④見慣れない (チョコレート緑・青)	弟が多め (他者優先)	平等

4種類全ての結果を見ると、両者ともに平等に分けたのが1回、自己を優先したのが2回、相手を優先したのも1回と全く同じようになった。①大きさが違うものは両者ともに自己優先をしている。結果は同じだが、弟Bは「自分のものの方が大きい」「自分の方が多い」というアピールが多く見られたのに対し、兄Aからはそのようなアピールはなかった。このことから、弟の方が自他の比較に敏感であり、兄に比べると自己優先度が高いのではないかと考えられる。

次に、お菓子を分ける順番に注目すると、表3のような結果になった。

表3. お菓子を分ける順番

	兄A	弟B
①大きさが違う (チョコパイ)	自分→相手(自己優先)	自分→相手(自己優先)
②数がわかりにくい (ポテトチップス)	交互	自分→相手(自己優先)
③味が違う (カントリーマアム)	自分→相手(自己優先)	自分→相手(自己優先)
④見慣れない (チョコレート緑・青)	相手→自分(他者優先)	相手→自分(他者優先)

兄Aは自分の分を先にとる自己優先が2回、相手の分を先に分ける他者優先が1回、どちらにも当てはまらないのが1回だった。弟Bは自己優先が3回、他者優先が1回と兄Aよりも自己優先が多い結果となった。そのため、弟Bの方が自己優先度は高いといえる。

今回の研究で、お菓子に対しての警戒心、興味・関心について新たな発見があった。保護者からインタビューで兄Aも弟Bもよく食わず嫌いをすると言っていたが、両者ともに見慣れないお菓子を必ず1口は食べていた。しかし、食べた後の反応に違いがあった。弟Bは興味があるようで積極的に食べていたのに対し、兄Aは何度も何味なのか質問したり、必ず弟Bが食べた時の様子を見てから食べたり、警戒している様子が見られた。この2人の反応の違いは出生順位の影響のみではないだろうが、兄の方が慎重で弟の方が挑戦的なことがわかった。

今回の研究では、ビデオカメラで撮影をしていたのも結果に影響を与えたのではないだろうか。兄Aがお菓子を分けている最中、弟Bが邪魔しにくると「もう1回最初からやろう。」と言ってきたのだ。他にも、「後で撮ったビデオ見せて。」と言ってくることやお菓子を食べている最中にカメラにアピールする場面がいくつかあった。対策として、実験を始める前や実験に

関係のない日に録画をしていたのだが、あまり効果はなかったようだ。奪いあいになったが、喧嘩することがなかったのは撮影していたのが影響していたかもしれない。

今回の研究では、お菓子の種類によって違いがあるのかを見た。しかし、ポテトチップスの取り合いの時のように、1人だけしかいない場面で「いない」と言っていたものでも、きょうだいと一緒にいる場面になると取りたくなることがあることがわかった。

他にも誰と分けるのか、また分けるものが食べ物ではなくおもちゃやものだった場合も変わるだろう。このような条件の違いによって分配方法も変化もあるのか調べていきたい。

6. おわりに

本研究は私自身が過去に経験したことがきっかけとなった。今でもお菓子を分け合うことはあるが、「この味が好きだから譲ろう。」「この前食べてなかったから多めにあげよう。」など相手を優先することが増えたと感じる。協力してくれた1組のきょうだいが遠慮せず自分の食べたいものを選んだり、好きなお菓子の取り合いをしたり、取られる前に急いで食べる様子が幼い頃の自分やきょうだいを見ているようでとても懐かしく感じた。

今回、お菓子の種類によって違いがあるのかを見た。きょうだいがいることで、競合場面が生じ、感情を調整しながら解決を目指し、分配が成立していた。他にも誰と分けるのか、また分けるものが食べ物ではなくおもちゃやものだった場合も変わるだろう。年齢差や男女差、さらに親からの教えからも影響があると考えられる。

参考・引用文献

- ・ Eisenberg, N., & Mussen, P. (1991): 思いやり行動の発達心理 (菊池章夫・二宮克美, 訳). 東京: 金子書房.
- ・ 平井美佳 (2017): 幼児における自己と他者の調整とその発達教育心理学研究, 2017, 65, 211-224
- ・ 依田・深津 (1963): 出生順位と性格 教育心理学研究第11巻第4号 p.239-246
- ・ 相川充 (2009): きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響 東京学芸大学紀要 総合教育科学系61巻1号 p.91-105
- ・ 市川 (向川) 祥子 (2010): きょうだい数・きょうだい構成・出生順位が被服を中心としたおしゃれへの関心に及ぼす影響—小中学生を対象とした研究— 繊維製品消費科学 2010年51巻5号 p.441-451
- ・ 苫米地なつ帆 (2012): 教育達成の規定要因としての家族・きょうだい構成—ジェンダー・出生順位・出生間隔の影響を中心に— 社会学年報2012年41巻 p.103-114
- ・ 星野翔一 青木健一 福住紀明 山口正二 (2011): きょうだい構成の視点からみた心理的距離に関する実証的研究 カウンセリング研究44(2), 127-135, 2011 日本カウンセリング学会
- ・ 篠原能子 曾我部夏子 (2014): 幼稚園児の食生活に関する保護者の意識と出生順位の関連について 駒沢女子大学 研究紀要 第21号 p.299-306 2014

謝辞

本論文の作成にあたり、実験協力をしていただきましたA県在住のご家族には、貴重な時間をとらせてもらい、感謝申し上げます。また、立正大学社会福祉学部子ども福祉学科3年の増田みやびさんには卒業論文作成においてお手伝いいただきました。皆様も協力なくしてこの卒業論文を作成することはできませんでした。卒業論文の制作に関係してくださった全ての方に熱く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

脚注

- (1) 国内の児童心理学や発達心理学等の領域においては、1960年代にはひらながの「きょうだい」という表記が見られる。出生順位の影響を主たる目的とする研究において、英語文献における sibling という性別を表さない語が用いられてきたこと、さらに、国内研究においても決して兄と弟のみを対象としない立場で、「きょうだい」という言葉のもつジェンダーへの配慮があるものと推測される。

(2022年8月24日受理)